

平成28年度  
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI  
(研究成果の社会還元・普及事業)  
実施報告書

HT28107 和菓子文化の魅力って何だろう？東京オリンピックで日本文化を世界に発信しよう！



開催日：平成28年8月7日(日)

実施機関：東海大学

(実施場所) (代々木校舎)

実施代表者：小澤考人

(所属・職名) (観光学部観光学科・准教授)

受講生：中学生12名、高校生5名

関連URL：[http://www.u-tokai.ac.jp/about/campus/yoyogi/news/detail/post\\_522.html](http://www.u-tokai.ac.jp/about/campus/yoyogi/news/detail/post_522.html)

【実施内容】

2020年東京オリンピックの先行モデルである2012年ロンドンオリンピックでは、音楽・映画・美術・ファッションなど文化資源の活用をつうじて国家ブランドを高め、イギリスの魅力を世界に発信する効果的な戦略が取られていた。当プログラムでは、こうしたロンドンオリンピックのレガシー戦略をふまえ、その文化発信の手法や取組みを東京オリンピックに活かすという視点から、日本文化の一要素としての和菓子文化の魅力とその海外発信の手法について、①講義と②和菓子作り体験、③ワークショップをつうじて、受講生の中高生に対してわかりやすくかつ楽しく学んでもらうことをねらいとした。

その際、和菓子文化をテーマとする以上、ふだん何気なく接している日常文化の一要素であるがゆえに、まずその魅力を私たち自身が知識と実践の両面から学び、体感する必要があるという観点から、①講義やレクチャーという座学スタイルでの知識の習得や理解だけではなく、②実際にプロフェッショナルによる指導のもとで和菓子作り体験をとおして和菓子文化に触れるとともに、③最終的にはこうした日本文化の一要素について広く海外発信をしていく手法を学ぶためにワークショップ型のグループワークを導入し、あらかじめ用意したキーワードをもとに受講生4人一組のグループごとにディスカッションを行い、その成果を教室の前で発表してもらうスタイルとした。このように全体をつうじて体験型学習およびアクティブラーニングの形式を前面に押し出すことで、ふだんそれほど自覚化していない日本文化の一要素について楽しく学びながら自覚化していく教育面での好循環のプロセスを実現させることを重視し、中高生という未来世代に対して新たな海外発信の担い手となる意義をわかりやすく後押しする工夫を行った。

当日スケジュールは、おおむね当初の予定どおり、開講式でまず受講生への当日の流れと注意点を伝達し、また科研費の仕組みとひらめき☆ときめきサイエンスの説明を行い、次に【講義1】では、冒頭で触れたロンドンオリンピックのレガシー戦略をふまえ、和菓子文化という日本文化の一要素に注目し、その魅力の由来や根拠に関する講義を実施した。具体的には、「和菓子文化の魅力」が「つながりを作り出す力」にあるという視点を設定したうえで、和菓子文化がコミュニケーションやおもてなし・社交など「人と人」のつながり、また名称や菓子に宿る「物語」の側面など「人と自然」(文化と自然)とのつながり、さらに「他の文化」とのつながりを自覚させる文化資源であることを解説するとともに、日本と世界を結びつけるコンテンツの一つであることを歴史・文化的観点から紹介し、また日本のおもてなし文化の形成と関わりが深いことを解説した。

次に、【体験実習】では、和菓子作りのプロフェッショナルとして特別講師の宮島勇三氏に指導を頂き、地下調理室のキッチンスペースで実施し、昼食をはさんで、どら焼きとねり切りの創作和菓子作りを行い、実際に体験をつうじて「和菓子文化の魅力」を体感する取組みを行った。また体験実習後の作品品評会および試食

会では、実施協力者の大学生が立てたお茶とともに、和菓子の鑑賞と賞味に伴う魅力を体感した。



以上をふまえて、【講義2】では、和菓子の魅力を外国人に伝え海外に発信する手法をテーマとして、ワークショップ型のグループワークを行い、受講生4人一組のグループごとにその成果を教室の前で発表してもらった。こちらで用意したキーワードとして、「ツアー・旅行」「和菓子の職人」「地元の和菓子屋さん」「百貨店」「和菓子づくり体験」「SNS・ロコミ」「お客様アンケート」など16種類の単語をヒントに、各自自由に新しいキーワードを加えてよいこととし、そこからアイデアをふくらませ積極的な議論を行ってもらった。かくしてグループごとの成果発表では、積極的な意見交換のもとユニークなアイデアが次々と表明される場となり、こうしたプロセスを経て若者世代が日本文化を海外発信してゆく将来の担い手となることを期待し、その表明を総括として受講生の全員に未来博士号を授与し、記念写真とともに閉講式とした。



受講生のアンケートでは、「とてもおもしろかった」「とても興味がわいた」「また参加したい」との声が多く、プログラム全体としては一定以上の成果を収めたと考えられる。このように当プログラムを成功裡に実現できた背景としては、事務局の協力体制が充実していた点を挙げることができる。東海大学代々木教学課・研究支援課の数名の方々を中心に、約半年間におよぶ準備プロセスが背景にあり、実施代表者の負担が重くなりすぎないように丁寧に至るまで多くの連絡調整やご支援を頂いた。こうした協力体制のもとで広報活動の面でも、チラシの作成やウェブ情報の掲載に関して多くのチェックや確認を行い、必要な情報の明示化などに努め、また受講生のケガや事故などの安全面、および体調管理面を考慮して保険加入の手続きや体調不良の際の緊急連絡体制の整備など、十全な安全配慮のためのシステム構築を整備した。そのほか当日のイベント遂行に際しては、実施協力者である大学生にも貢献してもらい、①地下調理室での和菓子創作に際しては受講生への補助・サポート役として、②【講義2】のグループディスカッションでは、各テーブルで議論や意見交換を促すファシリテーターの役割を担ってもらうなど、全体としてプログラムのイベント面での円滑な遂行に貢献させることに努めたが、視点をかえるとこうしたプログラムの実現に向けた補助プロセス自体がイベントプランニングやおもてなしの実践など、観光学部ならではの体験学習の一環となるよう大学教育の延長線上に当プログラムを位置づけ、実現することができたといえる。



なお参加者のアンケート結果を検討してみると、受講生からは「和菓子が好きになった」というものから、当プログラムの趣旨とねらいを本質的に理解したうえでまた参加したいという声も多く見られ(例えば「和菓子の文化だけでなく、和菓子の魅力、その魅力をどうやって外国人に伝えるかをみんなで考え意見を発表できる場をつくってくれたので楽しかったです。また、次も参加したいです」など)、また保護者からも多くの好意的な意見を頂いた事実(例えば「科学というと理科の実験を思い浮かべますが、今回のような和菓子作りもとても良かったです」「グループディスカッションがとても充実していた。実際に外国の方に来ていただき、一緒に話し合うのもっと、実感として強く残ったと思う。和菓子をもっと見直し、家族で味わう機会を増やしていきたいと思った」など)を総合的に考慮すると、全体として当プログラムの趣旨と構成については肯定的な評価を得たと受けとめてよいものと考えられる。

したがって今後の展望としては、①東京オリンピック開催を見すえた和菓子文化の海外発信というテーマでの継続・発展の可能性とともに、②科学(サイエンス)の成果還元というひらめき☆ときめきサイエンス事業の趣旨に対して、日本文化の海外発信など広く観光学に属するようなタイプのプログラムが可能であることを示したという点、③ならびに調理室などをもつ教育・研究機関ならではのプログラム実施にも援用できるという点など、今後の同型的なプログラムの継続・発展に対していわば成功事例の一つとして貢献できるものと考えられる。他方、あえて課題点を挙げるとすれば、準備に時間やエネルギーを要する点を別とすると、実施代表者の立場としては、中高生という受講生の学年・年齢を考慮した場合、わかりやすい側面を前面に押し出し、専門的な研究成果の報告という側面については手加減をしてしまう傾向があり、その点に関わるさじ加減については今後の工夫と調整の余地があると感じた。いずれにせよ総じて反省すべき課題の部分よりも、未来世代を担う受講生のリアクションからは、むしろ今後の発展性について印象づけられたと総括できるように思われる。

【実施分担者】 なし

【実施協力者】 12 名

【事務担当者】 代々木教学課 本多ももえ 他 3 名